

徐渭の代応制詞16首について（その2）

—霜と雪，秋と冬，山と水の詞—

村 田 和 弘 *

Study on Xu Wei's sixteen pieces of "Ci" poetry. (II)

— Poety of frost and snow, autumn and winter, mountain and river —

Kazuhiro Murata *

Received October 31, 2007

Abstract

Xu Wei (徐渭) was an artist who was famous as a painter, a calligrapher and a drama writer in late Ming dynasty. But it is not known that he leaves poetry as a poet very much, and it did not almost attract attention till now among other his works that he wrote "Ci" (詞) poetry. As for his "Ci", 28 poems exist in all, and 16 poems are works by a ghost writer of "Ci" in response to an order of the emperor. I give translation with notes and interpretation to 8 poems that described frost and snow, autumn and winter, mountain and river here and want to be based for study.

1. はじめに

前稿¹⁾では、徐渭の現存する詞について資料を確定し、代応制詞16首を考察の対象とすることの意義を述べ、その製作時期について従来の説を紹介し、結論を先取りする形で北京僑寓時製作という筆者の仮説を提出した。また徐渭の用語を確認する作業として各詞に訳注を施し、そこになんらかの特徴が見出されるかについて検討を加えた。前稿の繰り返しとなるが、徐渭の代応制詞16首は以下のように整理される。

【番号】は『徐渭集』を底本として筆者が附したもの。【詞題】と【詞牌】がそれぞれ番号に対応している²⁾。これら16首のなかで、詞牌を同じくする詞が、内容的にもある程度のまとまりを持つことは容易に予想される。そこで前稿においては、まず（1）から（4）の4首について訳注を施し、結論として2点のことが指摘できると述べた。1点目は、この4首は、はじめからひとまとまりとして作詞する意図が見えることである。4首の間で用語が相互に関連しあい、円環を描くようにまとまっていることがわかる。2点目は「代応制」という作詞スタ

* 未来創造学部
School of Future Learning

【番号】	【詞題】	【詞牌】
(1)・(2)・(3)・(4)	日・月・風・雲	漢宮春
(5)・(6)	霜・雪	応天長（推定）
(7)・(8)	山・水	齊天樂
(9)・(10)	霜・雪	念奴嬌
(11)・(12)	秋・冬	千秋歲（推定）
(13)・(14)・(15)・(16)	研・筆・墨・劍	鳳凰台上憶吹簫

イルからはずれるような用語の特徴が見られることである。皇帝の下命に応じるために準備する詞の、しかも代作であれば、過度の叙情性は避けられ、個性を表出することに主眼が置かれるのが常套であろう。だがこの4首には神話的イメージが多用され、神仙信仰や五行思想の要素が散りばめられており、そこに徐渭の個性、と言うよりはむしろ偏向を見出すことができる。本稿では、前稿で提出したこの仮説を踏まえながら(5)から(12)までの8首について訳注を試みていく。前稿同様に押韻箇所は、○で平声の押韻を、●で仄声の押韻を示し、入声押韻の場合は別に記す。

5) 霜

江柳疎黄，池荷脆緑，又早黄花催馥。青女凌晨，剪就輕綃三万斛，碧萸毛，銀箭鏃，籠滿玉樓金屋。更無端慘向沙蘆，驚雁群宿。却遙想，干將遠隔青霄，借与寒光燭。暗約豐山，僧鍾不叩鳴空谷。又特為，鄒生獄，颯然飛月当夏六。願爽鳩就義行仁，応秋金肅。

「霜」

江柳は黄に色あせ、池蓮は緑やわらぎ、また早くも菊花の馥郁たる香り立つ頃。青女は早朝を侵し、三万斛のうすぎぬを裂き、緑のやなぎの穂、白き月光、閣中にたちこめる。さらにおもいがけず岸の蘆に降り、群れ宿る雁は驚き飛び立つ。

かえて遥かに思う、干将の遠く空を隔て、寒々とした明かりを借し与えるかと。ひそかに豊山の鐘に知らせ、僧の叩かずとも空谷に響く。またとりわけ獄に下された鄒衍のため、さっと月を飛ばし夏の六月に降らせる。願わくは鷹の正しく仁を行い、秋に応じて肅然たらんことを。

入声押韻。川辺の柳の葉が黄ばみ、池の蓮も花が落ち葉だけが残し、早くも菊の花が咲く頃となった。秋の季節に見られる風物の点景である。「青女」は霜や雪を管轄するとされた神女のこと。『淮南子』天文訓に「陰暦9月になると、地の気が隠れず、(刑)殺を行わない。百蟲は伏しかくれ、戸を閉じ静居する。青女はそこで出でて、霜と雪を降らせる」と見え、高誘の注には「青女は天神、青□玉女、霜雪を主どる」とある³⁾。陰暦9月に霜が降る現象は『礼記』月令篇「季秋之月」にも「是の月や、霜初めて降る」と記されている⁴⁾。霜や雪を詠むのに相応しい神女ではある。だが青女は、むしろ次の李商隱の「霜月」に詠まれたような、美しい仙女としてのイメージの方が強い。

初聞征雁已無蟬	初めて征雁を聞き已に蟬無し
百尺樓高水接天	百尺の樓高 水は天に接す
青女素娥俱耐冷	青女 素娥 俱に冷さに耐え
月中霜裏闌嬋娟	月中の霜裏 嬋娟を闌わす ⁵⁾

晩秋の霜降る夜に皓々と照る白い月を眺めつつ、月の寒宮にて仙女二人が妖艶の美を競い合うと想像する幻想的な詩である。「輕綃」はうすぎぬのこと。漢代以前より輕綃で夏服を作るよう制度が定められていたことが『漢書』に見えている⁶⁾。夏から秋への季節の移り変わりを言うのに、神女が早朝に夏服の布地を切り裂くと表現する点に表現の新しさが伺える。ところで「青女」には文字通り「若い娘」という意味合いもある。唐の寒山の詩に「柳郎八十二，藍嫂一十八。夫妻共百年，相憐情狡猾。弄璋字烏鵲，擲瓦名娼媼。屢見枯楊萎，常遭青女殺」⁷⁾という1首がある。「楊萎」はやなぎの芽のことで、「青女」との組み合わせが徐渭詞と共通する。だが寒山詩では老人と若い娘の夫婦のことを詠っており、それを「枯れた柳の芽が霜にやかれる」と比喩的に表現しているところに諧謔味がある。「銀箭鏃」は白いやじりの意だが、ここでは降り注ぐ月の光を言うであろう。「糝」は落ちる，注ぐの意。唐の杜甫「絶句漫興九首」其七に「糝徑楊花鋪白氈，点溪荷葉暈青錢。」という句がある⁸⁾。

後関の「干将」は，干将莫邪と併称される劍の名。干将が陽劍で，莫邪が陰劍とされる。『呉越春秋』闔閭内伝や『搜神記』など諸書に故事が見える。霜との関連で言えば，唐の韓翃「送劉侍御赴陝州」詩に「金羈映驢驪，後騎佩干将」という句が見え⁹⁾，刀劍の輝きと嚴霜の白さを平行させて描くことがわかる。「寒光」は刀劍の放つ光を清冽な月光に比した表現であるから，ここに「霜＝刀劍の輝き＝月光」というイメージの連鎖をたどることができる。「豊山鍾」は『山海経』山経卷5中山経，中次十一経の「豊山」に「九鍾有り，是れ霜を知りて鳴る」とある¹⁰⁾。霜の寒気によって音を鳴らす鐘のことである。「鄒生」は戦国，齊の臨淄の人，鄒衍のこと。『太平御覧』卷14，天部，霜に『淮南子』を引き「鄒衍は燕の恵王に仕えて忠を尽くすが，左右のものが鄒衍を謗ったために王は鄒衍を獄に下した。鄒衍が天を仰いで哭くと，陰暦の夏五月に天は霜を降らせた」という記事が見える¹¹⁾。徐渭がこれを「夏六月」のこととするのは入声押韻のため上声の「五」ではなく入声の「六」としたのであろう。「爽鳩」は鷹のこと。『通典』職官典卷19，職官1の序の部分に「爽鳩氏は，司寇なり」とあり，その注に「爽鳩は，鷹なり。摯により，司寇となし，賊盜を取りしまる」と見えるところによれば¹²⁾，鷹はその獲物を捕らえる習性から，盜賊を捕縛する警視總監の官とみなされていた。また『藝文類聚』卷91鳥部，鷹の項は，『漢書』孫宝の伝を引き「孫宝が京兆尹であったとき，もとの下吏の侯文に掾となるよう要請した。立秋の日に，文が宝に，今や鷹隼が撃を始め，まさに天候に従い，嚴霜の誅を成すべし，と言った」とあり，また『京房占』を引いて「七月，鳩が化して鷹となる」ともいう。陰暦7月は秋の初めの月であり，鷹が天氣に応じて活動を始め，姦惡を取り除き，嚴霜の誅を行うと言われていたことがわかる¹³⁾。前関は女性的なイメージを詠み，後関は正義を行う厳しさを詠んでいる。

6) 雪

压梅横月，学絮従風，果是巧輪滕六。無数青峰，一夜尖尖髻銀蠹。浙江潮，崑山玉，对此景

依稀一粟，恍真成万里瓊瑤，遍籠華屋。正遙想，沙場從軍壯士，夜裏鉄衣宿。千古猶伝，
為解貂裘賜征蜀。緑樹簷，金盤醪，無人知外辺寒肅。願天公一示豊祥，早昇義旭。

「雪」

梅花を押し月に横たわり，柳絮をまねて風に舞えば，果たして巧みに膝六を送る。無数の青峰が，一夜にして銀の鬘を鋭く聳えさす。浙江の逆まく流れ，崑山の玉も，この景色に向かえばかすむ一粒，ほのかに輝きまこと万里の美玉たり，宮殿をあまねく包みこむ。

まさに遙かに思うは，砂漠に従軍する壮士の，夜，甲冑にくるまれて宿ること。千古なお伝えるは，貂の衣を脱ぎ征蜀の將軍に賜わること。緑樹の軒，金盤の美酒に，辺境の厳寒を知る人無し。願わくは天よ豊かな幸いを示し，早く太陽を昇らせんことを。

入声押韻。前詞の霜神の青女に対応させて，雪神である「膝六」を挙げている。だが雪神膝六は青女ほど由来の正しい神ではない。『太平広記』巻441，獣畜8，雑獣に引く『玄怪録』『蕭志忠』に見えるところが最も早い例であろう。まず物語のあらすじを紹介する。

唐の中書令，蕭志忠が晋州刺史であったとき，臘日に狩に出ることにした。その前日，ある樵が山へ入り，突然昏倒して岩穴に伏していると，なにやらひそひそ話が聞こえる。盗賊かと思い雑木の中へ隠れると，長身の異形の者が現れ，野獣を呼び集め，明日の狩で命を落す予定の獣を宣告していた。獣らは恐れ，命乞いをする。すると異形者は東谷の厳四兄に頼むとよいと言い，獣を引き連れて厳四兄を東谷に訪ねた。厳は「もし膝六に雪を降らせ，巽二に風を起こすよう折れば，狩は行われないだろう」といい¹⁴⁾，さらに膝六は最近つれあいを亡くしたから美人を紹介すれば雪が降るだろうし，巽二は酒好きだから，美酒を贈れば風が吹くだろうと入れ知恵した。果たして未明から強い風雪が起こり，終日止まず，蕭志忠は狩を行わなかった。

天人相関論的に言えば，人間世界の高官は天界でも高位に居り，高官の行為と天の命定とは連繫していると考ええる。ゆえに獣の落命は不可避である。それを獣の命乞いを入れ，賄賂で天の定めを変えてしまう話は，きわめて現実世界的である。この物語が「雑獣」に分類されるゆえんは，天の定めを獣に宣告し，雪神と風神という天機を洩らし，賄賂を勧めた異形の者が，実はもと天界の仙人で，落とされて虎となっていたが，期限が満ちたのでまた天へ戻るとされていることによる。ここで美人妻を紹介されて雪を降らせた神として登場するのが「膝六」なる神であった。由来の正しい神では都合が悪く，おそらくここで虚構された神である。だが転載を繰り返すうちに後世に伝えられた¹⁵⁾。

「学絮従風」は『世説新語』言語第二に見える謝道蘊の機知に富んだ語に基づく。謝安が寒雪の日に一族の子どもたちを集め文章の講義をしていたとき，俄かに雪が降ってきたので「白雪紛紛何所似」（白雪が舞う様子は何に似るか？）と問い，それと対句になる句を答えさせた。兄の子の謝朗は「撒鹽空中差可擬」（空から塩をまいたとなぞらえられる）と答えたが，兄の娘，謝道蘊は「未若柳絮因風起」（柳絮の風に吹きたつには及ばない）と答えたというもの¹⁶⁾。「浙江潮」は，陰暦9月9日の頃の杭州湾が満潮の時に，海水が銭塘江（浙江）を逆流する現

象のことで、ここでは逆巻く波頭の白い波しぶきを雪に見立てている。「崑山玉」は崑崙山に産する美しい玉のこと。白玉の白さをやはり雪に見立てている。

後関は戦役に赴く将兵の寒さがテーマとなっている。「千古猶ほ伝ふ、為に貂裘を解き征蜀に賜ふ」の句は『宋史』巻255、王全斌の伝に見える故事に基づく。全斌は冬の暮れに蜀に入り、都開封では大雪が降った。ちょうど太祖趙匡胤は毛皮のコートと帽子を被り、講武殿をフェルトの幕で囲わせて軍の視察をしていた。太祖は「厚着をしてもなお寒さを感じる。西征の将軍が霜雪を犯していることを思うと、何とも耐えられない」と言い、その場でコートと帽子を脱ぎ送り届けさせたという故事である¹⁷⁾。『宋史』王全斌伝の意図は、それが事実であるにしても、辺境の将軍を思いやるだけの人間味を持つ人物として皇帝を描くことにある。徐渭はこの故事を典拠としつつ、「緑樹の簷、金盤の隙、人の外辺の寒肅を知る無し」宮殿で美食する者は辺境の寒さを知らないと風刺する。直接皇帝を批判するものではないにせよ、諷諫の意が込められていると見てよいだろう。最後に「願はくば天公の一に豊祥を示したまひ、早に羲旭を昇らせんことを」と厳寒の早く去ることを願う。前関はもっぱら雪の美しさを詠み、後関は雪の厳しさと天の（つまり皇帝の）慈悲を希う。前後関でテーマを全く換える詠み方が前詞と対を成している。

7) 山

卷石初来横大陸、微翠宛同杯覆。及至無窮、巍然有矗、並是擎天蒼玉。九州四隩、儼鳳舞龍飛、虎蹲龜縮。五岳兒孫、双条南北擎鰲足。大則釀霧含雲、小幻出玲瓏、烟霞草木。巧映書窗、儘供詩料、馮写画図一幅。版章有属、看画拱瑤京、永屏黄屋。別展神虔、歳歳聞嵩祝。

「山」

はじめ拳ほどの石が来て大陸に横たわり、薄い緑はさながら杯を反すよう。果てしなく大きく集まり、巍然として直立し、また丸い蒼空をかかけ持つ。この世界の四隅に、儼然と鳳は舞い龍は飛び、虎は蹲り亀は潜める。五岳の子孫たる山々、南北二脈は鰲の足をかかけ持つ。

大なる山は霧を釀し雲を含み、小なる山は玲瓏たる輝きを幻出し、草木は煙霞にかすむ。書窓に映れば、詩材を提供し、一幅の画図を描くもととなる。版図は連なり、都の邸宅は、永く金屋を閉じるを見る。格別に謹み、連年嵩山の万歳を聞く。

入声押韻。初句の「卷石の初め来たりて大陸に横たはり」て山が生じるとする観念は、『礼記』『中庸』に基づく。

今夫れ天は、斯れ昭昭の多きにして、其の無窮なるに及びてや、日月星辰焉に繋り、万物焉に覆はる。今夫れ地は、一撮土の多きにして、其の広厚なるに及びてや、華嶽を載せて重しとせず、河海を振るって洩らさず。今夫れ山は、一卷石の多きにして、其の広大なるに及びてや、草木之に生じ、禽獸之に居り、宝蔵興る。今夫れ水は、一勺の多きにして、其の不測なるに及びてや、鼃黿蛟龍魚鼈焉に生じ、貨財殖ゆ¹⁸⁾。

「天地の道は、一言にて尽くすべきなり」という言葉で始まるこの一節は、天地自然が、ほんの僅かなものから、はかりしれない広大さと豊かさを蔵するものへと生成することを喝破する個所である。ここに見える「天・地・山・水」の4つで世界の天地自然を網羅するという発想は、徐渭の「山・水」詞の基調音ともなっている。「無窮に至るに及びては」は、「中庸」では天に使われており、「烟霞草木」は、山の宝蔵として言及されている。

「微翠」はかすかな緑という意味で実景を詠むように見えるが、『爾雅』『釈山』に「未だ上に及ばざるは、翠微なり」とあり、山の形状を言う語である¹⁹⁾。「蒼玉」は蒼穹すなわち蒼天と同じ意味であろう。直立して蒼天を支えるという神話的表現は、読者に崑崙山を想起させる。例えば『藝文類聚』巻7、山部上、崑崙山の項に引く『龍魚河図』は「崑崙山は、天の中柱なり」という。次句の「九州の四隅に、儼鳳舞ひ龍飛び、虎蹲まり亀縮む」というのは、四神獣が大地を支えるという表現であり、こちらは五行思想的発想である。五行思想は複雑なものであるが、ここでは五行に基づいて木火土金水に、それぞれ龍、鳳、人、麒麟、亀の五霊が配当されることだけ確認できればよい。そして木火土金水がやはり東、南、中央、西、北の五方位に配当されるため、詞中の「鳳、龍、虎、亀」はそれぞれ南、東、西、北の四方を指すことになる。詞句で「虎」とするのは、五神獣で金の西に配当されるのが白虎であるため。字数の関係で1字の「虎」を選択したのであろう。なお五神獣は青龍、朱雀、勾陳・騰蛇、白虎、玄武とされる²⁰⁾。「五岳」も諸説あるが、一般的には東岳を泰山、南岳を衡山、西岳を華山、北岳を恒山、中岳を嵩山とする。

ところで「宛ら杯の覆すに同じ」と詠まれた山の形状と、「五岳の児孫」「双条南北、鰲足を擎ぐ」という山の表現はいささか特異である。「鰲」は伝説上の大海亀。海中に棲み、背に蓬萊山などの仙山を背負っているという。仙山を捧げ持つ大海亀の足が、南北2つの山脈であるというのだ。そして仙山と繋がる山脈とは、風水思想で言うところの龍脈を指すのではないだろうか。つまり徐渭はここで龍脈を詠んでいる。この仮説に沿って読解を試みてみよう。一般的に龍脈は崑崙山から3本に分かれて中国へ入り、西岳と北岳を含む北幹、中岳と東岳を含む中幹、南岳を含む南幹となるとされる²¹⁾。詞譜によれば「双条南北擎鰲足」7字の句式は〔仄／平〕平〔平／仄〕仄仄平仄とされる²²⁾。すなわち1字目が仄声なら3字目は孤平を避けるために平声となり、逆に1字目が平声なら三平を避けるために仄声となる。だが「双条南北」では1字目も3字目も平声であり、句式からはずれず。徐渭はあくまで「双条南北」という表現に拘ったことになる。この詞が北京客寓中に作られたという前稿の仮説に立てば、徐渭は、現在の居住地都北京を含む北幹と、故郷浙江を含む南幹とを意識したと考えられよう。かくこの「双条南北」が南北二筋の龍脈を指すのだとすれば、風水的に理想的な山々を五岳の子どもたちと詠んでも不思議ではない。では「杯を覆す」山が、なぜ真先に詠まれる必要があるのか。他が観念的なイメージの連鎖であるのに、ここだけ山の景観を具体的に詠むのはなぜか。上昇方向の描写と対比的に水平方向の表現を取ったとするのはよい。それでもなぜ「杯を覆す」なのか、やはり疑問に残る。

ここも風水観から考えよう。徐渭の生きた明代には、山の景観を分類整理してカタログ化した風水の指南書が存在する。例えば『玄関』という書物のなかには、山の景観を九つのカテゴリーに分類する九曜という分類法が見える。九曜は五つの吉と四つの凶に分かれる。その五つの吉のなかに「其の体の矮なること釜を覆すが如し」と形容される形状が見られるのである²³⁾。

『玄関』の刊行年は崇禎5年（1632）であり，徐渭がこの書を直接参照したわけではない。だが徐渭がこうした風水観の流行に即して山を描写したと考えることは，十分に可能であろう。つまり前関は神話のイメージや五行思想そして風水観に基づき，観念的に山について綴ったものであることが解る。

後関の「玲瓏」は，宝玉のように冷たく冴え輝くさまを言う語であるが，唐の白居易「長恨歌」の「楼阁玲瓏五雲起」が想起される。玄宗は馬嵬坡にて楊貴妃に死を賜り蜀へ蒙塵し，その後再び都へ戻る。臨邛の道士が死者の魂魄を招くことが出来ると聴き，道士に仙界へ赴き楊貴妃の亡魂を探させる場面となる。

忽聞海上有仙山	忽ち聞く 海上に仙山有り，
山在虚無縹渺間	山は虚無縹渺の間に在り。
楼阁玲瓏五雲起	楼阁 玲瓏として五雲起こり，
其中綽約多仙子	其の中 綽約として仙子多し。
中有一人字太真	中に一人有り 字は太真，
雪膚花貌参差是	雪膚 花貌 参差として是れなりと ²⁴⁾ 。

海上に仙山があるという。山は何一つないところにあり，そこに瑞雲たなびく輝く楼阁があり，そこに多くの仙女が住まい，その中にひときわ美しい仙女がおり，名を太真という。それが仙女となった楊貴妃の魂であった。このように「玲瓏」という語は，容易に仙山を連想させる詩語であり，後関も仙山のイメージを受け継いでいる。「詩料」は詩の題材という意味。書齋の窓に映る山の姿は，詩の題材となり，絵のテーマとなるという表現も，具体的な山の描写ではなく，山についての発想である。

「版章」は版図，境域の意。「有属」は連続すること。「拱」は拱木，「画拱」で美しく裝飾された邸宅の意。「瑶」は美字，「瑶京」はきらびやかな都の意。「黄屋」は金屋のことであろう。美しく飾った屋敷の意。ここの一連の措辞は，仙山の楼阁のように都北京の宮殿は美しいと述べ，次の皇帝への賛辞を引き出す。「嵩祝」は嵩呼のこと。漢の武帝が嵩高山（中岳の嵩山に同じ）に登ると，山の神が万歳を三呼する声が聞こえてきたという故事が『漢書』武帝紀に見える。嵩呼が連年ありますようにと皇帝を祝福する。

8) 水

一勺初生天一後，応未滿蹄沔簷溜。及至無窮，茫然東走，依稀萬馬馳驟。何方最陡。有灩澦如牛，淮渦鎖獸。挂瀑飛珠，澄江淨練風吹皺。那更薰柳春塘，浮花曉澗，綠窗難繡。魚喜相投，龍欣或躍，正是今時候。聖明親覲，卜海晏連年，河清旬昼。中外欣欣，鼙鼓馮夷奏。

「水」

一勺の水が天一の後初めて生じ，まだひずめの跡ほども満たないうちに軒から雨だれが落ちる。きわまりない流れとなり，果てしなく東へ流れ，あたかも万馬のはやがけするかのよう。いずこがもっとも急なながれか。灩澦堆の牛のごときあり，渦水と淮水に獸を鎖に繋ぐ。飛瀑を掛け飛沫を飛ばし，澄んだ長江は汚れない練り絹のごとく風が皺のよう

なさざなみを吹く。

柳の枝をひたす春の池塘，花を浮かす暁の谷川，女性の部屋の窓に映り刺繍し難いほど。魚は喜び戯れ，龍は欣喜し跳ね上がる，まさに今がその時。聖上は自ら逢わん，占いて海の連年静かに，黄河の旬日澄むと。内外ともによろこび，鼉鼓は夷狄の臣服に従い鳴らされる。

「一勾」も前「山」詞と同様に「中庸」を典拠とする。だが「中庸」には「天一」という語はない。「天一」が最初に記されたのは『周易』においてである。『易経』「繫辞伝上」に次のようにいう。

天一，地二，天三，地四，天五，地六，天七，地八，天九，地十。天の数は五，地の数は五，五位相得て各々合ふ有り。天の数は二十有五，地の数は三十，凡そ天地の数は五十有五。此れ変化を成し鬼神を行ふ所以なり²⁵⁾。

陰陽思想と数字との神秘的な関係を述べる一節である。奇数は陽で天に属し，偶数は陰で地に属す。天の数字は5つ，地の数字も5つ，それぞれ和を求めれば25と30となり，総計で55となる。この5つの奇数と偶数はペアを組む。天一地二，天三地四，天五地六，天七地八，天九地十という隣あうペアと，天一地六，地二天七，天三地八，地四天九，天五地十という相対するペアを作ることができる。これが「五位相得て各々合ふ有り」の意味である。この数字の各ペアを図式化したものが存在する。すなわち「河図・洛書」である。「河図・洛書」というものも「繫辞伝上」において初めて言及されたもので，これをもとに聖人が八卦を作ったとされている。そして奇数を○，偶数を●として「河図・洛書」を視覚的に再現して見せたのが南宋の朱熹であった。朱熹は十三経の中から四書五経を抜き出し，五経の一つである『周易』に自注を加え『周易本義』を編纂したが，その巻頭に「河図・洛書」図を掲載した²⁶⁾。明代に入ると，四書五経が科挙の公式テキストとされたため，この「河図・洛書」図は，士人たる者の常識となっていたと考えてよい。ところで『周易』は天地自然，森羅万象を象るものとしての八卦とそれを生み出した陰陽の数字のシステムを言うに過ぎず，未だ水との関係には言及していない。水と関連させて解釈するのは後漢の陰陽五行思想の流行を待たねばならない。『易緯乾鑿度』巻下の「易変じて一と為り，一変じて七と為り，七変じて九と為る。九なる者は，気変の究みなり。乃ち復た変じて一と為る。一なる者は，形変の始めなり。清軽なるものは上りて天と為り，濁重なるものは下りて地と為る」に加えられた鄭玄の注に「七は南方に在りて火を象り，九は西方に在りて金を象り，六は北方に在りて水を象り，八は東方に在りて木を象る」と見えるのがそれである²⁷⁾。これを踏まえて朱熹は，「繫辞伝上」の自注において先ず「此れ天地の数を言ふ。陽奇陰耦，即ち所謂河図なる者なり」と述べ，これが「河図・洛書」図についての言及であることを説明し，次いで「変化とは，一変じて水を生じ六化して之を成し，二化して火を生じ七変じて之を成し，三変じて木を生じ八化して之を成し，四化して金を生じ九変じて之を成し，五変じて土を生じ十化して之を成すを謂ふ」と述べる²⁸⁾。このような論理から明代では，「天一が水を生じ，地六がこれを成す」という言い方が一般的となっていた。嘉靖11年（1532）の進士范欽（1506－1585）により寧波に築かれた蔵書楼が「天一閣」と名付けられ

るのも、天一が水を生じ、火災から免れるよう願ってのものである。徐渭と全く同年代にこのような命名法が取られることが、徐渭の発想が広がりを持つことを物語っている。

「蹄涔」は牛や馬の足あとにたまった水。「簷溜」は軒から落ちる雨だれ。「及至無窮」は前述した。天の水は僅かであっても地に降れば大雨となり、集まり川となり、はるか海まで東流する。河川の東流という現象については、早く漢代の『淮南子』天文訓に「昔、共工が顓頊と帝位を争い破れ、怒って不周山に触れると、天柱は折れ、地維は絶たれた。ために天は西北に傾いて日月星辰が偏り、地は東南に下がって水が地を流れた」²⁹⁾と神話的解释が施されていた。「陡」は険しい。「瀕瀕」は瀕瀕堆のこと。四川省奉節県の西南、長江の瞿唐峡の入り口にそそりたつ大岩であり、三峡の急流のことをいう。「鎖獸」は禹の治水神話の一つ。治水の邪魔をする無支祈という水怪を淮水と渦水の間で捕らえ、鉄の鎖で縛り現在の江蘇省淮陰県の龜山の麓に閉じ込めたという³⁰⁾。ただし同様に水神を退治した伝説で、李水が蜀の郡主であったときのこととするものもあり、ここは両者をまぜあわせたような言い方になっている。前関は「中庸」、『周易』など經典を出処とする語、河川にまつわる神話伝説、そして名だたる長江の急流と穏やかな流れを詠む。

後関は前関末の穏やかな川のイメージを承ける。「緑窗」は婦女の部屋の窓。前「山」詞の書斎の窓に映る山と対比させて、ここでは女性の閨房の窓に映る川を詠む。龍と魚というアイテムはやはり「中庸」を典拠とする。「河清海晏」は国内が安定し、天下泰平であることの喩え。「河清」は『易緯乾鑿度』巻下に見える「天の將に嘉瑞を降さんとするや、応じて河水清きこと三日」に基づき³¹⁾、昇平祥瑞の予兆である。「三日」を「旬昼」すなわち旬日に変えている。皇帝自ら占トし、素晴らしい瑞兆が得られた。ところでこれは何のための占トであろうか。「馮夷」という語から考えて、北虜南倭と呼ばれた明朝中期の外憂の鎮圧を願ってのことであろう。「鼃鼓」は鰐の皮を張った太鼓あるいは表面に鼃文を装飾した青銅製の太鼓で、『詩経』大雅・文王の什「靈台」に見える。靈台は辟雍の一つ、神靈を迎える祭事を行う施設である。そこで鼃鼓が「逢逢（ポンポン）」と打ち鳴らされた³²⁾。鼃鼓は、「中庸」に水中に生じる動物の一つとして挙げられたことからの連想であろう。鼃鼓が夷狄征服に際して鳴らされるという表現の直接の典拠は見当たらず、徐渭の生涯に即して考える必要がある。すなわち「馮夷」が対倭寇戦か、それとも対韃靼戦かにより詞作時期が変わってくる。

9) 霜

金天白帝當時令，一夕操符握柄。万瓦鴛寒，五更鷄冷，簇滿海綃稜勁。雁行斜引，渺烟水蒼橫，蒹葭白迴。震沢酣楓，洞庭熟橘，好風景。追論伯奇已遠，耿中野嚴凝，徘徊履影。六月曾飛，一夫得免，青女親教響応。遭逢有幸，凜孝子忠臣，千秋明証。百事防微，更有堅氷警。

「霜」

秋になり白帝が季節を司るや、一晩のうちに命令を下す。万瓦に鴛鴦は寒く、五更に鶏は凍え、海綃に寒さが集まる。雁は斜めに列を引いて飛び、はるかにかすむ水面は蒼く横たわり、あしの穂は白く遠い。太湖の楓は赤く染まり、洞庭山のみかんは黄色く熟す、なんともよい風景。

伯奇を論ずれば今すでに遠く、月光のもと野に厳しい寒さが凍り、徘徊して月光を踏む。

かつて6月に降り、一夫が罪を免れ、神女自ら饗応させた。幸いにめぐり合い、凜として孝子忠臣たること、永久に証明する。万事に防微し、さらに堅氷の警告あり。

霜の季節が陰暦9月の秋であり、「金」「白」ともに五行説で秋の季節に配当される。したがって「金天」は秋の空、「白帝」は秋を司る神となる。「簇」は群がり集まるの意。「海綃」は鮫綃ともいい、海中の鮫人が織った布という伝説が『述異記』などに見える。ここは前「霜」詞で用いた「輕綃」と対比的に用いられている。「稜」は「稜稜」で、寒さの厳しい様を示す。「勁」は強い意。「稜勁」で非常に強い寒さを言う。「震沢」は湖名。江蘇省の太湖のこと。「洞庭」は太湖のなかにある包山を指し、特産品として橘が名高い。太湖の「好風景」は珍しく実景であろう。

後関の「伯奇」は古代の孝子の名。周宣王時の重臣尹吉甫の長子。『初学記』巻2、霜の事対「尹逐伯奇」に引く『琴操』によると、吉甫は継母の讒言から伯奇を放逐してしまう。伯奇は水荷を編んで衣とし、薊花を採って食とし、寒い朝は霜を踏む暮らしをする。罪なくして放逐されたことを悲しみ、琴曲「履霜操」を作り、思いを托したという³³⁾。また同項の詩には、梁の張率の「詠霜」詩「原野生暮靄，堦墀散夕霏。徘徊總蔽氣，悵望淪清輝。平台寒月色，池水愴風威。凝陰同徂夜，遞雁独帰飛」を引く。この「霜」詞と重複する語が散見される点が目を惹く。「六月曾て飛び」とは、前述の鄒衍の故事を踏まえる。もと「五月」であるべきところ、前詞は入声押韻の関係で「夏六」としたが、ここはそれを踏襲している。ちなみに鄒衍の故事は、「尹逐伯奇」と対をなす事対の「燕繫鄒衍」として『初学記』に見えている。「青女」も前詞に既出。「堅氷」は硬く凍りついた水。やはり『初学記』巻2、霜に『周易』の「履霜堅氷」を引くのが見え、坤の「初六，履霜堅氷至る」に基づく。「防微」は小さな兆しに気をつけ重大事にならないようすること。坤の「象伝」に「履霜堅氷とは、陰始めて凝るなり。其の道を馴致すれば、堅氷に至るなり」とあり、初六という陰の微弱な兆しを放置すれば、霜もやがて堅氷となるように事態が推移するという意味である³⁴⁾。国家の大事に至らないよう忠臣孝子たるもの警戒を怠るべきでないという心構えを述べる。以上のように、この詞では『初学記』に見える典拠が既出の語ばかりが用いられている。

10) 雪

巧剪飛花呈六出，不是尋常風物。鶴舞天長，蟹行沙密，比擬形声猶失。裏粧都畢，綵富貴簷楹，寒微蓬華。此付瓊堆，彼分玉糝渾如一。銷金帳底人醉，更掃將梅上，茗烹团月。鳥跡千山，人蹤万景，保尽炊烟未必。九重密勿，正喜卜豊祥，西疇如櫛。猶恐民貧，數問長安陌。

「雪」

巧みに六弁の花を切り飛ばす、尋常な風物にあらず。鶴の果てなき空に舞い、蟹の砂中へ潜るよう、形声を擬えても猶お当たらない。包み込む化粧を終える、すべて富貴な屋敷の軒や柱も、寒賤の家の垣根も。美しく積もれば、玉も米粒もみな渾然として同じ。

金の帳のもと人は酔い、さらに梅の枝を払い、満月に茶を煮る。鳥の足跡は千山に、人の足跡は万景に、かまどの煙も消えがちに。宮中では手落ちなく、まさに豊祥を占うを喜び、西田は櫛比す。それでも人民の貧しきを心配し、しばしば長安の道に問う。

入声押韻。雪の結晶が六角形あるいは星形に似た六弁であることは、古来より知られていた。『初学記』巻2、雪の項に引く『韓詩外伝』に「凡そ草木花は五出多し、雪花のみ独り六出なり」とあり³⁵⁾、植物の花弁が多く五弁であるに対して、雪だけが六弁であると指摘する。前「雪」詞で雪神を「滕六」と名づけるのも、この「六出」を踏まえてである。次の雪が音もなく人に気付かれず降る様子を、鶴が空に舞う姿と蟹が砂中へもぐりこむさまと喩えることは、珍しい表現である。また、貧家の籬にも富貴の邸宅にも同じように雪は積もり、美しく覆われてしまえば玉も米粒も区別無くなるという表現は、俗に過ぎよう。

後関の「九重」は天子の御殿のこと。「密勿」は君側で機密に与る者のこと、また公務を手落ちなく処理すること。重臣たちはまず降雪を占い、この雪が瑞祥であることを喜ぶ。「西疇」は西の田畑。唐の韓愈の詩「南溪始泛」に「幸有用余俸、置居在西疇」という句が見える³⁶⁾。ここでは豊かさの比喻である。田畑が櫛比し、順調な降雪により豊作が予兆されることを喜ぶ。それでも貧しく餓寒に犯される人民を、君主たる者は心配すべきであると諫めている。前関は貧富の関係なく雪に覆われることを詠み、後関はそれと対比的に降雪時の宮中のあるべき反応を詠む。末尾で諫言を入れる点は前「霜」詞と同様である。

11) 秋

菊英初綻、霜色籠金瓣。露下蛩、天辺雁、明河清浅影、丹桂扶疎燦。賞心处、玉楼龍笛風中散。輕颺吹不斷、千尺虹流殿。報海屋、籌添算、良宵三五夕、仲月光逾滿。此時節、千官競祝吾皇誕。

「秋」

菊の花が綻び始め、白い霜が金の花弁を覆う。露下のおおろぎ、天上の雁、天の川の清く浅い流れは輝き、月桂の四方に伸びる枝はきらめく。心を楽しませるところ、玉楼に龍笛の音が風に散る。

そよ風は吹きやまず、千尺の虹は高殿に流れる。海上の仙居へ知らせ、数取りの籌を加え、満月の夜、中秋の月光はいよいよ満ちる。この時こそ、千官は競ってわが皇誕を祝う。

「菊英」は菊の花のこと。菊花が秋に咲く花であることは経験的に知るところだが、『礼記』月令の「季秋之月」にも「鴻雁賓に來り、爵（雀）大水に入りて蛤と為り、鞠（菊）に黄華有り、豺乃ち獸を祭り禽を戮す」と記され³⁷⁾、陰暦9月の花と認識されていたことが知られる。「黄華」を「金瓣」と読み替えるのは五行説の応用であるが、感覚的にも首肯できる。露に関して『礼記』月令の「孟秋之月」に「涼風至り、白露降り、寒蟬鳴き、鷹乃ち鳥を祭り、用って行獵を始める」とあるのが見え³⁸⁾、露が陰暦7月の風物であるという認識が示される。雁の飛来も陰暦9月の自然現象とされたこと、「季秋之月」に見える。「蛩」はコオロギ。『詩經』豳風「七月」に「十月蟋蟀、我が牀下に入る」という句が見える³⁹⁾。この「蟋蟀」がコオロギなのかキリギリスなのか判然としないが、いずれにせよ陰暦10月に虫が寝台の下で鳴くと、いよいよ冬の季節という認識である。「明河」は天の川。宋の歐陽脩「秋声賦」に「星月皎潔、明河在天」という句が見える⁴⁰⁾。「丹桂」は月桂と同じ。「丹」は赤色をいうが、明るさをいう美

辞であろう。月の桂の木については、前稿「月」詞に説明したので繰り返さない。「玉楼」も、前稿「月」詞の「七宝層楼」と同様に、月の仙宮を指す。

ここまでは秋の季語を散りばめた表現である。では次の「龍笛」とは何か、「龍笛」の音が風の中に散ずるとは何を言うのか。龍が笛を修飾する美辞だとすると、その対象は皇帝である。つまり皇帝の吹く笛を指す。「風中散」は「明河」「丹桂」との関連を考えれば、月の宮殿へ行き、そこで風に乗って笛の音が広がると解釈される。月宮へ行き夜空で笛を吹く皇帝など、唐の玄宗をおいて他にいないであろう。つまりここは「唐明皇遊月宮」と呼ばれる、俗文学の世界では有名な故事を踏まえていると考えられる。『太平広記』巻26、神仙26の「葉法善」に引く『集異記』及び『仙伝拾遺』からの故事が初出に近いであろう。それは以下のような説話である。

8月中秋の夜、宮中で月見の宴をしていた玄宗は、道士葉法善を召し、その道術によって月宮へ遊び、月にて天の音楽を聴いた。曲名を問うと「紫雲曲」という。玄宗は音律に詳しく、その曲を諳んじ、地上に伝えて「霓裳羽衣曲」と名づけた。月宮からの帰途、潞州城の上を通過するとき、空から見ると城内が静まり返り、月光が昼のように明るく照らしていた。葉法善は術で帝の玉笛を取り寄せ、空中にて演奏を請う。玄宗は演奏を終えると、金銭を城中に投じ、宮中へ戻った。10日後、潞州から上奏があった。8月の満月の晩、天楽が城内に響き、また金銭を獲たので献上する、というものであった⁴¹⁾。

潞州は現在の山西省長治市にあたる。この故事は明末の『拍案驚奇』巻7「唐明皇道を好み奇人を集め、武惠妃禪を崇め異法を闘わす」の正話に白話小説化されている。『拍案驚奇』は崇禎戊辰（1628年）の凡例を持ち、徐渭よりも後年の成立であるが、故事の明末での広がりや何うには十分であろう。とは言え、皇帝への献上を前提とした詞で『太平広記』を出典とするような用語を使用することは、雅正を欠く。現今の皇帝を唐玄宗に擬えるにしても、荒唐無稽な神仙故事に傾くことは否めない。

後関は前関末の風を受けて、「輕颺」が吹き、「千尺虹」が宮殿に懸かる様子を詠む。この虹が美しい薄絹の比喻であるとすれば、玄宗故事に出てきた「霓裳羽衣」を踏まえての言葉であろう。だが文字通り虹を月への架け橋と読むことも可能である。『太平広記』巻22の「羅公遠」は、先の「葉法善」と同じ話題を羅公遠のこととして語る。だが一つ異なるのは、月への往復方法が、葉法善は風を利用するのに対し、羅公遠は杖を銀の橋に変えて月へ渡ることである⁴²⁾。あるいは虹はこの橋を意識しており、玄宗の月への往復を、前関での聴覚的イメージと対比させて、視覚的イメージとして表現したと考えることもできるであろう。

「海屋添籌」は長寿を祝う慣用語。「海屋」は仙人の住まう海上の屋敷。仙鶴が毎年1籌（数取りの竹べら）を加えに来るという。「三五夕」は十五夜のこと。「仲月光」は仲秋の満月。つまり中秋満月の時に誕生日を迎え一つ齢を重ねるという意味である。そしてその対象が「吾が皇誕」とある以上、これが今上の皇帝への生誕祝いであることは疑いない。そこで「皇誕」が誰の生誕を指すか判明すれば、作詞の年号が確定することになる。私見では、それは万曆帝を指す。万曆帝朱翊鈞は、嘉靖42年陰暦8月17日酉の時に、穆宗の第三子として生まれているからである⁴³⁾。万曆帝は、まさしく仲秋の満月とともに生まれたといえる。この仮説が正しけ

れば、「代応制詞」は万暦登極後に作られたことになり、前稿の北京僑寓時説が補強される。

12) 冬

繽紛朔雪，天地呈三白。玉樓台，銀宮闕，粧点無窮景，較算何方別。清禁裏，碧簷綠樹琳琅結。賜遠伝貂帽，焚香添麝屑。殷勤祝，分明説，降瑞不宜多，兆豊応有節。勤思念，豈無貧者長安陌。

「冬」

北からの雪が乱れ飛び，天地は三度の白さを示した。玉の樓台，銀の宮門，雪景色は限りなく，何処の方か区別もしがたい。清らかなる宮中，碧軒や緑樹に宝玉のごとく氷結が付く。

遠く貂の帽子を賜り送り，香を焚き麝香の粉末を添える。慇懃に祝い，あきらかに言う，瑞祥を降すも多すぎないほうがよく，豊兆はまさに時節に適うべきと。謹みて思うは，長安の道に貧者の無いことがあろうかと。

入声押韻。降雪は季節に従って適度にある限りにおいては瑞祥であった。それは天候が順調である証拠であり，治世の平穩であることの証明でもある。「繽紛」は乱れ飛ぶさま。「朔雪」は北からの雪。「三白」は三度雪が降ることを意味する。「三白」という語は，明の唐寅「擬瑞雪降群臣賀表」に「伏して思うに，正しく六花の雪を放ち，もって自然の変化の不思議を目睹す。めでたい徴として三たび白く染まるは，まことに聖徳を明らかにするし」と見えており⁴⁴⁾，「三白」が祥徴とされたことがわかる。徐渭は唐寅（1470－1523）と入れ替わるように生まれており，一世代前の文人として，その文章を目にした可能性はある。

唐寅は弘治12年（1499）の会試における試験問題漏洩事件の巻き添えとなり，科挙への道を閉ざされてしまう⁴⁵⁾。したがって群臣賀表に擬えた文章を制作する動機としては，科挙を経て朝臣となる希望をいまだ胸に秘めていた頃，事件以前の若年の作と考えてよいだろう。この唐寅の文章には，徐渭の（10）の「雪」詞やこの「冬」詞と共通する語や発想が見られる。幾つか唐寅の語を列挙し説明を加えてみよう。

- ①「氷鏡飛瑤，璇空墜玉」（氷結を美玉に喩える）
- ②「万井之豊穰已卜，九重之泰祉方来」（豊穰を占い，安寧の吉兆を得る）
- ③「恭惟皇帝陛下，道合混元，心涵太素，宰陰陽之橐籥，握造化之枢機。析穀祈年，精意久通于碧落，宜禾宜黍，先徵遂兆于元冥。」（皇帝の精意が天に通じ，豊穰を約束し，徴を示した）
- ④「万里瑤瑤，凍起玉樓之粟」（「玉樓」という語の使用）
- ⑤「上下同雲，山川一色」（雪化粧で何もかも区別がなくなる）

①④は雪の輝きに関して，⑤は一面覆い尽くす現象に関してである。②③は雪を瑞祥と見る観点で，皇帝の治世への予祝の意味が込められている。むろんこうした共通点は，徐渭が唐寅を模倣したというものではなく，皇帝へ献上することが前提となる作品で雪を描く場合の常套表現としてこのような措辞が存在していたと考えるべきであろう。唐寅は「表」に擬した文章を書いた。徐渭は「代応制」という状況で詞を書いた。だが前稿で考察したように，実際にそう

した要求があり書いたのではなく、おそらく徐渭自身が「代応制」スタイルに「擬えて」書いた創作と考えられる。二人の製作スタイルも似ていることが、共通する語の見られる原因でもあろう。

後関の「賜遠伝貂帽」は前の「雪」詞にも見える故事。雪は瑞祥であるが、皇帝たる者、都長安にも貧者がいることを慮るべきと諫言して終わる。

2. 小結

以上8首について訳注を試みてきた。語句の使用のありかたを検討するなかで確認できたところをまとめておこう。

まず注目されるのは、代応制詞16首の作詞時期の確定について、詞本文に拠り所のあることである。(11)の「秋」詞の「此の時節、千官競って吾が皇誕を祝ふ」句が現今の帝位にある皇帝への生誕節の祝辞であり、陰暦中秋の時節が皇誕とされていることから、その皇帝は万暦帝であろうと推定される。もし万暦即位後に作詞されたとすれば、それは嘉靖帝の時代、胡宗憲の幕下にあったときではなく、張元汴の力添えによって罪を釈かれ、北京へ赴き元汴の幕客となっていた時のことである。ところで16首のなかで季節を詞題とするものは今回の6首だけであり、その季節がすべて秋・霜と冬・雪という2つの季節に限られている。それも皇誕を中心に考えれば、作詞の動機として頷けよう。

かく季節が皇帝と関連するゆえか、この8首の詞末尾には皇帝への言及が見られる。言及のパターンは2種類ある。1つは祝福する言辞、1つは諫める言辞である。(7)「山」、(8)「水」、(11)「秋」詞などは祝福する類型であり、(6)と(10)の「雪」詞、(12)の「冬」詞などは飢寒者への視線を喚起する諫言の類型である。(5)と(9)の「霜」詞は、諫言とまではないが、刑罰の厳しさと防備、警告の厳しさを持つ言辞となっている。

用語については、やはり『初学記』『藝文類聚』など作詩教本に見える程度の語彙を連ねることが多い。そして前稿でも指摘したように、神仙故事については特異な用例を見出せる。同じ唐の玄宗にまつわる故事を踏まえるにせよ、白居易の「長恨歌」とともに、『太平広記』に見える神仙故事を踏まえる表現は、やはり徐渭の道術への傾倒を示すと考えてよいだろう。『太平広記』からはもう1話、『玄怪録』に出る志怪小説に見える雪神を詠むが、賄賂で降雪を左右してしまう神を代応制詞中へ点綴することは、いささか俗に過ぎる。また山の描写が風水思想の龍脈に基づくとする推測が正しければ、やはり俗説を容れる態度の表れである。また五行思想に基づく発想の多用や、緯書を由来とする語など、総じて明という時代の嗜好を反映するものではあるが、それを詞中へ詠み込む点は、徐渭の個性のしからしめるところである。範を示さんと意気込む側面と同時に徐渭の個性の発露も見え、唐寅の擬表同様に、虚構としての代応制詞と考えることができるだろう。

註

- 1) 拙稿「徐渭の代応制詞16首について(その1)」北陸大学紀要第30号(2006), 2007年3月。
- 2) 中国古典文学基本叢書『徐渭集』中華書局出版, 1983年点校本を底本とする。以下、本文の引用は

- 全てこの本に従う。なお【詞牌】に「(推定)」とあるところは、もともとの版本に詞牌の記載がなく、底本が注記しているものである。
- 3) 原文は天文訓が「至秋三月，地氣不藏，乃収其殺，百蟲蟄伏，靜居閉戸，青女乃出，以降霜雪」，高誘注が「青女，天神。青□玉女，主霜雪也」。□の1字不明。なお『初學記』卷3，秋の項の引用は不明個所を「要」に作り、『太平御覽』卷14天部，霜の項の引用では「天」に作る。
 - 4) 原文は「是月也，霜始降，則百工休」。
 - 5) 『全唐詩』卷539による。「樓高」を「樓台」とする版本も多いが，ここでは『全唐詩』に従っておく。
 - 6) 『漢書』元帝紀に「齊三服官」とあり，顔師古注に「李斐曰，齊国旧有三服之官。春献冠幘縹為首服，紬素為冬服，輕綃為夏服，凡三。……顔師古曰，齊三服官，李說是也。縹与縹同，音山爾反，即今之方目縹也。紬素，今之絹也。輕綃，今之輕縹也」とある。縹は紗に同じ。
 - 7) 『全唐詩』卷806による。
 - 8) 『全唐詩』卷227による。
 - 9) 『全唐詩』卷244による。
 - 10) 原文は「有九鍾焉，是知霜鳴」。袁柯校注『山海經校注』上海古籍出版社，1991年点校本による。『初學記』卷2，霜の項に『山海經』を引く。
 - 11) 原文は「鄒衍事燕惠王尽忠，左右譖之，王繫之獄，仰天哭。夏五月，天為之下霜」。やはり『初學記』卷2，霜の項に見える。
 - 12) 原文は「爽鳩氏，司寇也」，注は「爽鳩，鷹也。摯，故為司寇，主賊盜」。中華書局，1984年万有文庫十通本の重印本による
 - 13) 原文は「孫宝為京兆尹，請故吏侯文為掾，立秋日，文謂宝曰，今鷹隼始擊，当順天氣，成嚴霜之誅」。『藝文類聚』卷3，歲時上，秋の項にも見える。『漢書』卷77，孫宝伝は「以立秋日署文東都督郵。入見，敕曰，今日鷹隼始擊，当順天氣取姦惡，以成嚴霜之誅」とし，引用文とは多少異なる。『京房占』の原文は「七月鳩化為鷹」。『漢書』は中華書局，1992年点校本による。
 - 14) 原文は「若祈滕六降雪，巽二起風，既不復遊狩矣」。『玄怪錄』は上海古籍出版社，1985年校注本75頁から78頁による。
 - 15) 注14) 前掲書の校注には「滕六，虚構的雪神名。雪花六出，因以六為雪神名」と注している。「雪花六出」については後述。なお「巽二」についても「巽二，虚構の風神名。『易』説卦有巽為風之説，故以巽為風神之姓」と注し，やはり虚構の名とする。また校勘記によれば，この一篇は『類説』『紺珠集』『龍威秘書』などに「滕六降雪巽二起風」の題で転載され，諸書に収録されているという。
 - 16) 徐震堉『世説新語校箋』中華書局，1984年点校本による。
 - 17) 原文は「全斌之入蜀也，適属冬暮，京城大雪，太祖設氍毹帷於講武殿，衣紫貂裘帽以視事，忽謂左右曰，我被服若此，体尚觉寒，念西征将冲犯霜雪，何以堪处。即解裘帽，遣中黄門馳賜全斌，仍諭諸将，以不逼及也，全斌拜賜感泣」。中華書局，1990年点校本による。
 - 18) 原文は「今夫天，斯昭昭之多，及其无窮也，日月星辰繫焉，万物覆焉。今夫地，一撮土之多，及其広厚，載華嶽而不重，振河海而不洩。今夫山，一卷石之多，及其広大，草木生之，禽獸居之，宝蔵興焉。今夫水，一勺之多，及其不測，黿鼉蛟龍魚鼈生焉，貨財殖焉」。読み下し文については金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫，1998年を参考にした。
 - 19) 原文は「未及上，翠微」。四部叢刊本による。『初學記』卷5，総載山第2にも引くが『釈名』としている。
 - 20) 五行思想の用語については諸書に解説が見られるが，ここでは上田信『風水という名の環境学』農山漁村文化協会，2007年，第一章「大地を読む」に簡明にまとめているところによった。
 - 21) 以下，風水学及び龍脈の概念については，注20) 前掲上田2007を参照した。
 - 22) 『欽定詞譜』北京市中国書店，1983年，康熙五十四年内府刻本影印本による。
 - 23) 『玄関』についても前掲上田2007を参照した。五吉凶のなかに右弼金または太陰金と名づけられた類型があり，その説明に「楊公名右弼者，以其体矮如覆釜也」という文言が見える。
 - 24) 『全唐詩』卷435による。
 - 25) 原文は「天一，地二，天三，地四，天五，地六，天七，地八，天九，地十。天数五，地数五，五位相得而各有合。天数二十有五，地数三十，凡天地数五十有五。此所以成变化而行鬼神也」。『十三經注疏』本による。読み下し文は高田真治，後藤基已訳『易経』岩波文庫，1969年初版を参考とした。なお易に関しては諸書を参照させていただいたが，全て省略に従ったことをお断りしておく。
 - 26) 『四書五経』北京古籍出版社，刊行年不明による。
 - 27) 原文は「易変而為一，一変而為七，七変而為九，九者氣変之究也，乃復変而為一。一者形変之始，清輕上為天，濁重下為地」，鄭玄注は「七在南方象火，九在西方象金，六在北方象水，八在東方象木」。安井香山，中村璋八輯『緯書集成』河北人民出版社，1994年前言版による。
 - 28) 原文は「此言天地之数。陽奇陰耦，即所謂河図者也。(略)变化，謂一變生水而六化成之，二化生火而七變成之，三變生木而八化成之，四化生金而九變成之，五變生土而十化成之」。注26) 前掲書による。

- 29) 原文は「昔者，共工与顓頊爭為帝，怒而触不周之山，天柱折，地維絶。天傾西北，故日月星辰移焉，地不滿東南，故水潦塵埃歸焉」。
- 30) 袁珂『中国の神話伝説』青土社，1993年，羿禹篇下第二章345－6頁を参照。
- 31) 原文は「天之将降嘉瑞，応河水清三日」。『初学記』巻6，河巻3にも引かれる。鄭玄の注には「応とは，聖王の為政，治平の致す所」とある。
- 32) 原文は「於論鼓鍾，於楽辟雍，鼉鼓逢逢，矇瞍奏公」。
- 33) 原文は「履霜操者，伯奇之所作也。伯奇，尹吉甫之子。甫聴其後妻之言，疑其孝子伯奇，遂逐之。伯奇緇水荷而衣之，采蘋花而食之，清朝履霜而自傷無罪見放逐。乃援琴而鼓之」。『太平御覽』巻14，天部14，霜の項にもほぼ同文が引かれている。
- 34) 原文は，坤が「初六，履霜堅氷至」，「象伝」が「履霜堅氷，陰始凝也。馴致其道，至堅氷也」。
- 35) 原文は「韓詩外伝云，凡草木花多五出，雪花独六出」。
- 36) 『全唐詩』巻342による。
- 37) 原文は「鴻雁来賓，爵（雀）入大水為蛤，鞠（菊）有黄華，豺乃祭獸戮禽」。括弧内は筆者が読み替えた字。『初学記』巻3，歳時上，秋の項に引かれる。
- 38) 原文は「涼風至，白露降，寒蟬鳴，鷹乃祭鳥，用始行戮」。やはり『初学記』巻3，秋の項に引かれる。
- 39) 原文は「十月蟋蟀，入我牀下」。
- 40) 李逸安点校『欧陽修全集』巻15，中華書局，2001年点校本による。ただしこの語は賦の本文ではなく序文に出てくる侍童の言葉である。欧陽修が夜，読書をしていると妙な物音がするので侍童に出て見に行かせたところ，侍童が「星月皎潔，明河在天，四無人声，声在樹間」と返答した。
- 41) 原文は「又嘗因八月望夜，師与玄宗遊月宮，聆月中天楽。問其曲名，曰紫雲曲。玄宗素曉音律，默記其声，歸伝其音。名之曰霓裳羽衣。自月宮還，過潞州城上，俯視城郭悄然，而月光如昼。師因請玄宗以玉笛奏曲。時玉笛在寢殿中，師命人取，頃之而至。奏曲既，投金錢于城中而還。旬日，潞州奏八月望夜，有天楽臨城，兼獲金錢以進」。
- 42) 原文は「開元中，中秋望夜，時玄宗于宮中玩月。公遠曰，陛下莫要至月中看否。乃取拄杖，向空擲之，化為大橋，其色如銀，請玄宗同登（以下略）」。
- 43) 『明神宗実録』巻1（中央研究院歴史語言研究所校印，民国54年刊行）による。樊樹志『晚明史（1573－1644年）』第二章「明神宗；十歳登極の小皇帝」321頁，復旦大学出版社，2004年にも言及がある。ちなみにもう一方の可能性のある嘉靖帝朱厚熜は，『世宗実録』に「正徳二年八月初十日生」とある。
- 44) 原文は「伏以端発六花，式略化工之妙，祥徴三白，允昭聖徳之符」。『唐伯虎全集』北京市中国書店，1985年，大道書局1925年唐仲冕序本排印本重印による。
- 45) 内山知也『明代文人論』第五章「唐寅の生涯と蘇州文壇」，木耳社，1986年を参照。

引用文献

- 『淮南子』『爾雅』 四部叢刊 収，上海書店，挾商務印書館1926年影印重印本
『初学記』 司美祖前言（民国50年）排印複製重印本，刊行所不明
『太平御覽』 上海涵芬樓影印宋本複製重印本，中華書局，1985年
『礼記』『周易』『詩経』 阮元校刻『十三経注疏』影印本，中華書局，1983年
『全唐詩』 中華書局点校本，1992年
『藝文類聚』 上海古籍出版社，1999年排印本
『太平広記』 中華書局，1986年点校本

（待続）